

しおんだより VOL.9



食べることを、徹底的にサポートします！

私たちが何気なく行っている“食べる”という行動は、食べ物を見て→お口の中に取り込み→噛み→飲み込む、などの一連の流れによって成り立っています。

当院には、2名の言語聴覚士が在籍し、患者さんの食べることをサポートします！

その過程のいずれかが障害された状態を「摂食嚥下障害」といいます。高齢者は摂食嚥下障害の有無が大きな問題となります。飲食物が食道ではなく、気管に入ってしまった場合、通常はむせて気管から出そうとする防御反応が働きます。

しかし、この機能が低下すると、気管に入り込んだ食物を出すことができず、結果として肺炎を起こすことがあります。このように食べ物や唾液などが気管に入ってしまうことを誤嚥といい、誤嚥が原因で起こる肺炎を誤嚥性肺炎といいます。2018年には年間約11万人が肺炎で亡くなっていますが、そのうちの70%程度が誤嚥性肺炎とされています。超高齢化社会を迎えた現在、摂食嚥下障害への対応は単に医療面だけでなく、健康寿命の面からも非常に重要なものになっています。



言語聴覚士が取り組む仕事

言語聴覚士とは、話すことや聞こえの障害によりコミュニケーションに問題のある方や、摂食嚥下障害の方に対し、検査、評価を行い、指導や助言を行うリハビリの専門職の一つです。

脳卒中後の言語障害（失語症、構音障害）や、聴覚障害、声や発音の障害などの内容を観察、評価し、原因を加味してコミュニケーションの訓練を行ったり、食べる為に必要な筋力（舌・口唇・頬等）の強化、誤嚥してしまった時に食物を吐き出す訓練を行ったりしています。

その他に、口腔内の環境や機能の維持・向上を図る口腔ケアや、患者様一人ひとりに見合った接触時の姿勢や食形態の調整、さらに実際に食物を用いて嚥下訓練などを行います。ご本人やご家族の意見や希望を聞きながら、患者様に最も適したリハビリを提供します。



嚥下機能の改善にはチームの力が欠かせません

また、当院の消化器内科の医師や外部の歯科医師と連携し、内視鏡をのどに挿入し、外からでは見えない食物の飲み込みを直接モニターで観察して、誤嚥やのどへの残留の有無などを調べる嚥下内視鏡検査を行っています。しかし、食べ物や飲み物のむせの軽減ばかりに目を向けていたり、口やのどだけにアプローチするのでは、実は高齢者の嚥下リハビリはうまくいきません。

高齢者の誤嚥性肺炎の治療や予防のためには、全身状態の内科的安定性や栄養状態、

認知機能、身体機能、活動レベルなどを包括的に評価してかかわることが大切です。その為には、適切な病気の診断やリスク管理に基づいて、医師や看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、ケアワーカーなどとそれぞれの専門性を生かしたチーム医療が不可欠です。



多職種との連携を深め、チーム医療の実践を進めています。

これからも患者様やご家族の方に「思温病院に入院して良かった」と喜んで頂けるようにチーム思温病院の一員として様々な事に取り組んで参ります。

しおんだより 第9号 発行日：令和3年7月15日

発行人：狭間研至 発行元：医療法人嘉健会 思温病院

☎557-0034 大阪市西成区松1-1-31 電話06-6657-3711 HP: www.shion-hp.or.jp